



写真1 伝・関戸由義

川嶋禾舟（右次）（1933年6月）「關戸由義氏事蹟一斑」
神戸史談會『兵庫史談』2巻6号60頁より転載

解説

神戸市街造成と越前福井藩―福井藩人事関係資料から読み解く

松田裕之

はじめに

大阪湾内に巨大港を擁する国際都市神戸の原型は、慶応三年十二月七日（西暦一八六八年一月一日）の開港から明治十（一八七七）年頃までに粗方ができあがった。その青写真を描いたのが、越前福井出身の関戸由義（写真1）である。

開港まもない神戸に私費で洋風小学校を建て、兵庫県官となってからは貿易行政に手腕を発揮するとともに、二大幹道である滝道筋（現フラワロード）と栄町通を造成。山手高台の住宅地に碁盤状の街路を整備し、市民の憩いの場として諏訪山温泉郷を開発。さらには、地元の経済発展に資する人材を育成しようと神戸商業講習所の創設に尽力した。

これほどの実績を残しながら、関戸に関する検証は従来ほとんど為されてこなかった。「それでは」と調査を開始したが、残された記録が思いのほか少なく、しかもそれらの間には多くの空白があることを知った。

この窮地を救ってくれたのが松平文庫（二〇一九年十一月福井県立図書館寄託から福井県文書館に移管）に残された浩瀚な福井藩人事関係資料とその管理に携わる福井県立図書館・福井県文書館の方々なのである。

本稿では、関戸由義という謎多き人物の生涯を『港都神戸を造った男 《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社 二〇一七年）と題する評伝にまとめた筆者自身の体験をもとに、福井藩人事関係資料の活用例と有用性を示し、今後、幕末維新史・地方史研究、あるいは家系・人物調査に携わる方々の参考に供したい。



写真2 「新番格以下増補雜輩」表紙
松平文庫 福井県文書館保管

一、福井藩人事関係資料との出会い

まず、関戸の出自をめぐっては、「撰津三田藩士」説と「越前福井藩士」説が唱えられてきた。筆者は神戸市文書館より紹介された村野山人（関西屈指の鉄道事業家）宛の関戸書簡のなかに「生雲丹国三元より持ち帰り」という一節を見つけ、「三田藩士」説を斥けた。撰津国内陸部に位置する三田（現・兵庫県三田市）で生雲丹を入手できるはずはない。

もつとも、関戸が「越前福井藩士」であることを裏付ける資料にたどり着くまでにはいささか時間を要した。導きとなったのは、関戸に論及した既存の諸研究にしばしば登場する福澤諭吉との親密な交流である。『福澤諭吉書簡集』（慶應義塾 二〇〇一年）を調べたところ、福澤が知人に宛てた書簡のなかに「私知人関戸良平と申人」（明治五年十一月七日付島津復生宛）や「旧越前藩之人」（明治二十二年十月十五日付田中不二磨宛）という記載を確認できた。右書簡に関連した論文（西澤直子「奥平家の資産運用と福澤諭吉―新資料・島津復生宛福澤諭吉書翰を中心として―」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』第一一巻 一九九四年）には、松平文庫「新番格以下増補雜輩」（以下、「雜輩」）のことも記されていた。

早速、デジタルアーカイブ福井で「雜輩」（写真2）を閲覧すると、その最終丁に「横濱也輪違 関戸良平 一明治二已十二月四日民部省通商少佑申付候事 一通商権大祐 一同三年十二月五日通商少佑儀被免、本官候条此段相達候事」という記載（写真3）があった。

「明治二已十二月四日民部省通商少佑申付候事」という一節をもとに、『明治三年大蔵省官員録（筆写）』（早稲田大学図書館蔵『大隈文書』所蔵）を調べたところ、「通商司 少佑」項に「福井（朱書） 関戸良平」の記載を確認できた。この「関戸良平」が「関戸由義」と同一人物であることは、『明治初期官員録・職員録集成』第二―三巻（柏書房 一九八一年）に採録された明治三年二、四、五、六、八、十、十一各月の「大蔵省通商司少佑」項の「源 由義 関戸」という記載からも裏付けられる⁽¹⁾。

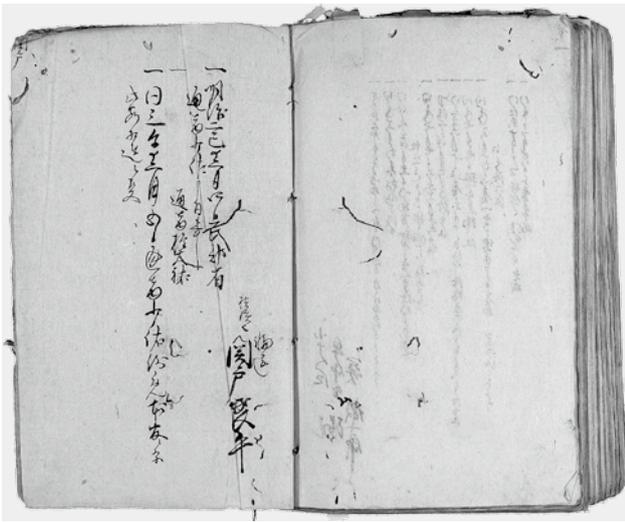


写真3 「関戸良平」履歴

松平文庫 福井県文書館保管

とはいえ、関戸が「越前福井藩士」であるなら、藩政期の履歴も「雑輩」に記載されているはずだ。この点を長野栄俊氏（福井県文書館主任）にお訊ねしたところ、「民部省に出仕した関戸良平の名が「雑輩」に収録されたのは、本来ならば人事諸記録の採録対象となる藩士身分^{士分}ではなく、また、そうした身分の者の子弟にも該当しなかったにもかかわらず、新政府の役人^{官員}となったために、藩として改めて彼の名を把握しておく必要が生じたためと推測できる」旨の教示を頂いた。

確かに、関戸以外の「雑輩」収録者を眺めても、明治維新後に官員身分を得た者や医療の現場業務に就いた者が多く、彼等もまた藩政期の履歴がほとんどない。「雑輩」の記載と長野氏の説明から、筆者は関戸が「藩士」の範疇^{カテゴリー}に含まれず、むしろ明治維新による封建的身分制の止揚を機に己が才覚を頼りとして社会階梯を登った、いわば下剋上型の成功者と理解した。

二、サンフランシスコ渡航をめぐる

明治四（一八七一）年三月二十四日に兵庫県外務局勸業課少属として神戸入りして以降の関戸の事績については、神戸市文書館、神戸市立中央図書館、兵庫県公館県政資料館、神戸大学附属図書館、神戸地方法務局に残る文献史料によって、比較的容易に追跡できる。

対照的に、それ以前の足取りとしては、明治維新前夜に混乱の極みにあった江戸市中で書画骨董・民芸品を安値で買い集め、サンフランシスコでそれらを売り捌いて巨利を得た、という「一攫千金」的な成功譚が伝えられているにすぎない。

筆者はしかし、そのなかで「サンフランシスコ渡航」に着目した。関戸が神戸近代化に果たした最大の貢献は、市街地整備計画の立案と幹道敷設・宅地造成事業の推進にほかならない。地勢とそれに適合した都市整備という観点から眺めれば、神戸市街はサンフランシスコ市街と共通する点が少なくはない。

関戸のサンフランシスコ渡航についても、長野氏から貴重な情報を頂いた。一八六八年五月十三、二十七日、六月十七日付『ハワイ王国官報 (*The Hawaiian Gazette*, May 13, 27, June 17, 1868)』(以下『官報』)に「関戸氏 (Dr. Sekido) 率いる日本人一行がアイダホ号でハワイを訪問し、呉服反物を地元の資産家に販売した後、アイダホ号でサンフランシスコに渡った」ことを報じた一連の記事が掲載されているという。

当時、横浜からハワイを経てサンフランシスコに至る航海には、約三十日前後を要したと推測される。逆算すると、「関戸氏率いる日本人一行」を乗せたアイダホ号が横浜を出港したのは、一八六八年三月中旬―和暦では慶応四年二月末頃―のことになろうか。

右掲『官報』記事の日付と同じ時期にサンフランシスコで活動していた日本人を調べると、若き高橋是清(これきよ)の存在を確認できた。慶応三(一八六七)年八月、十六歳の時に仙台藩留学生としてサンフランシスコに到着している。その回想記『高橋是清自伝 上巻』(中公文庫 一九七六年)に「越前(えちぜん)の医者某というのが、維新の騒ぎに、いろいろの品物を二束三文に買倒して、それをアメリカに持って来て一儲け(ひともう)しようとかかった」という記述がある。後述するが、関戸は渡航直前まで江戸で医者を開業していた。

筆者は維新混乱期に関戸がサンフランシスコへ渡航したことを事実と認定しても問題ないと判断したが、手塚晃編『幕末 明治 海外渡航者総覧』第一―三巻(柏書房 一九九二年)を眺めても、留学または視察のために海外渡航した人物約四二〇〇名中に「関戸」姓の者が見当たらない。つまり、関戸のサンフランシスコ渡航は密航の可能性が高いのだ。

したがって、その実行に際しては信頼のおける協力者が必要となるが、そこには福井藩関係者の姿が見え隠れする。ひとり、横浜で福井藩商館石川屋を差配していた岡倉覚右衛門(かくえもん)。明治期美術界を牽引した岡倉天心の実父としても知られるこの人物については、松平文庫「新番格以下」に「郡奉行井原次郎左衛門組 岡倉覚右衛門 坪田」とある。もうひとり、日頃より石川屋に

出入りして岡倉とは親密であった外商のユージン・ヴァン・リード。

藩家老を務めた本多敬義―松平文庫「剝札」には「本多義ヨロシ 四郎右衛門 鋭次郎 修理 大藏 波釣月」と記載―がものした『越前藩幕末維新公用日記』（福井県郷土誌懇談会 一九七四年）によると、岡倉は福井藩探索方を務めていた。内外の事情に通じたヴァン・リードは大切な情報源であったはずだ。かたやハワイ総領事の肩書を持つヴァン・リードは日本人労働力のハワイ輸出事業を目論んでおり、慶応三年四月二十二日より二回にわたって神奈川奉行所から計三五〇名分の旅券発行を受けている。海外渡航希望者からすると、ヴァン・リードに依頼すれば、煩瑣な申請手続を経ずとも横浜発のチャーター船に乗り込むことができた^②。関戸はこの両名に協力を仰ぎ、維新の混乱に乗じて密航を敢行したのではなからうか。

また、『官報』記事には、関戸一行の通訳として『Zangimoto』あるいは『Yangimotu』なる人物も登場するが、これは福井藩士の柳本直太郎かもしれない。「新番格以下」には「柳本直太郎 直帰 久斎 直太郎」とある。小坊主・表坊主を務めた後、藩より江戸就学を命ぜられた。そして、幕府直轄の蕃書調所を経て、慶応二年二月に福澤諭吉の慶応義塾に入塾。翌三年四月、藩命を受けてアメリカに留学している。

『Zangimoto』あるいは『Yangimotu』がアメリカ留学中の柳本であったとすれば、岡倉がサンフランシスコに自邸を持つヴァン・リードを介して関戸の渡米を前以て柳本に通知し、現地で通訳として協力するように依頼したということにならうか。関戸の密航の裏では、福井藩関係者間の密かな連係がうかがえるのである。

三、「横濱也」と「輪違」が意味するもの

サンフランシスコより帰国した関戸は、横浜商人小西屋伝蔵のもとに身を寄せ、猟官運動を行ったようだ。そのことを示すのが『貨幣之儀二付奉申上候』（以下『貨幣之儀』）。「横濱本町四丁目

小西屋伝蔵厄介 関戸良平」が、「同弁天通五丁目門屋幸之助」かじやこうのすけとの連署で民部省に提出した建白書（早稲田大学図書館蔵『大隈文書』所蔵）である。

これは明治新政府が慶応四年五月に発行した不換紙幣^二金札きんさつの不備による居留地貿易の混乱を指摘し、その是正方法を提示したものだ。明治二年十二月の民部省出仕は、この『貨幣之儀』を評価されたことであろう。「雑輩」の「関戸良平」という記名の上に添えられた「横濱也」は、任官当時の関戸の居住地を示したものである。

なお、連署人の「門屋幸之助」の本名は伊東哲之助信保で、実父は將軍家主治医にして江戸に種痘所を創設した蘭方医学の泰斗伊東玄朴いとうげんぼく。穿った見方をすれば、関戸は密貿易で得た資金を活用し、門屋幸之助に建白書の代筆を依頼する一方で、横浜商人衆の人脈を介して任官工作を図った可能性もある。

関戸の謎多き前半生が少しずつあきらかとなるなか、筆者は神戸市街整備計画に関する一次史料を確認すべく三井文庫を訪ねた。三井組は滝道筋・栄町通敷設や山手住宅地造成に多額の融資を行っている。関連文書群のなかには、関戸の前半生を暴いた追号一六四二―四一―『関戸由義関戸左一郎戸籍写』（以下『戸籍』）・追号一六四二―四一―『関戸左一郎身分内密取調書』（以下『調書』）があった。

『戸籍』によって、関戸の生年月日は文政十二（一八二九）年十月二十五日であると判明。『調書』は「関戸左一郎」が明治十七（一八八四）年に貸金返済をめぐる西京三井銀行を訴えたことから、同行が裁判に備えて準備したものだ。ここでは紙数の都合上、『調書』添付の報告書「捜索原証」の内容を略記するにとどめたい。

「戸籍」によると、関戸由義・左一郎の兄弟は福井藩医の第四代山本正伯しょうはく（関彦輔せきひこすけ）の次男・三男となっているが、これは詐称である。由義は福井城下呉服下町の薬種問屋輪違屋わちがいやの分家で煎薬業を営む第四代平兵衛と、正伯の家に奉公していた乳母との間に生まれた。幼名を良平と称し、

正伯のもとで下男奉公していたが、父平兵衛の死去にともなって輪違分家を相続。しかし、本家筋の妻女と通じた廉で家財没収・越前追放の刑に処される。その後、良平は京都の按摩師山口家の食客となり、同家の子女フサと結婚。このフサの実弟が左一郎である。慶応年間、良平一家は京都を去り、江戸で医者を開業。この頃より、関戸姓をもちいて『由義』と名乗る。洋行後、官途に就くが、任官中に福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こすべく転属工作を行った。なお、詐称被害に遭った第五代山本正伯（山本正）は、由義と親密に交際している」

「雑輩」の「関戸良平」という記名の横に添えられた「輪違」は関戸の本姓であった。「雑輩」編纂者は「関戸良平」がかつての罪人＝輪違良平であることを把握していたことになる。

「搜索原証」のなかで鍵となる人物が、関戸に「実父」と詐称された山本正伯。松平文庫「御医師」に「山本 関彦輔」とある。長野氏からは松平文庫「姓名録 七 ムウノクヤ」収録「山本正伯 関彦輔」の筆耕が届けられた。それによると、山本家は代々「御目医師」、つまり眼科専門の藩医を務めている。

ここで筆者は輪違平兵衛が山本家に乳母奉公していた女性を妻に迎えた経緯に着目した。「搜索原証」に「事故アリ妻トナシ（事情があつて妻に迎えた）」という奇妙な一節があったからだ。密偵は「事故」の具体的内容を記していないが、筆者はつぎのように推測した。

「事故（事情）」とは、正伯が奉公人の乳母を誤って懐妊させたことを指すのではないか。正伯は家名を守るために、妊娠中の乳母を輪違平兵衛に「引き取らせた」のではないか。山本家が邸を構える福井城下亀屋町（現福井市春山一丁目）と輪違屋の店舗がある呉服下町（現福井市春山二丁目）とは隣接しており、生業柄、両者の間には取引関係があつたと推測される。平兵衛が「事故」処理を了承した見返りとして、正伯は平兵衛の子として生まれた自身の子＝良平を「下僕」という名目で手もとに置いて医師修行をさせ、将来に保証を与えようとしたのではないか。正伯はこのことを跡継ぎの山本正（良伯）にも打ち明け、異母弟を秘かに支援しよう託したので

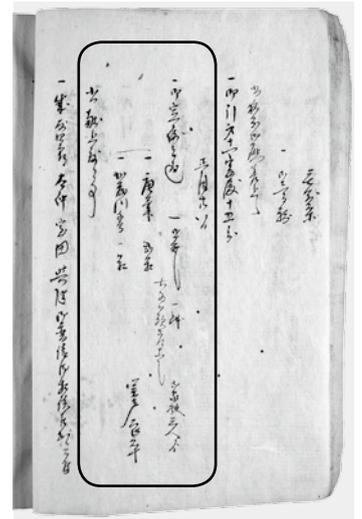
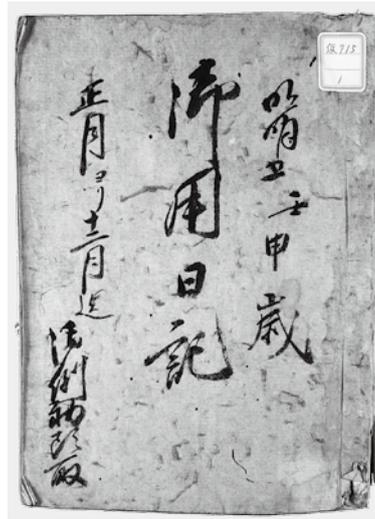


写真4 「御用日記」明治五年正月二十八日の記載（丸枠部）

松平文庫 福井県文書館保管

はないか。関戸はおそらく越前追放に際して出生の秘密を山本父子から知らされたのではないか。輪違良平が関戸由義として神戸近代史に名を刻む過程で訪れた幾つかの転機に照らせば、右推測の蓋然性は低くない。この人物は人生の岐路に立つたびに、一介の町人では為し難い拳に打つて出る。無論、本人の才覚もあつたに違いないが、それらはいずれも福井藩の有力筋に繋がる人間の存在無くして実現が不可能なことであつた。そこに藩医として松平家に仕えた山本正伯父子の存在が、おのずと浮かび上がる。

関戸が飛躍する契機となつたサンフランシスコへの渡航には、関戸と岡倉を結びつける人物の存在が不可欠であろう。それ以上に興味をそそるのは、「搜索原証」に民部省出仕中の関戸が「福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こすべく転属工作を行つた」旨の記述があること。ここで「福井旧知事」とは、松平慶永（春嶽）を指すと考えられる。

民部（大蔵）省通商司から県外務局勸業課への転属は、どちらも産業振興を管轄する部署であり、下級官吏の職歴形成という視点から眺めると、順当な流れではあるものの、関戸が神戸港を管轄する兵庫県庁に都合よく転属できたのは偶然ではあるまい。慶永は関戸が民部省に出仕する直前まで初代民部卿の座にあつた。

関戸と慶永の交際は、松平文庫「御用日記」および慶永が綴つた日誌『礫川文藻』れきせんもをう（福井市立郷土歴史博物館蔵）によつて確認できる。松平邸家従が付けた宿直簿である前者「明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄」（写真4）の「明治五年正月二十八日」には「一唐筆 一箱 一賀茂川千鳥 一箱 関戸良平 右献上致候事」という記載があり、おそらくこれが現存する右掲ふたつの日録に関戸の名が登場した最初の箇所と考えられる。

なお、「御用日記」の閲覧には長野氏と宇佐美雅樹氏（福井県文書館主任）、『礫川文藻』の閲覧には印牧信明氏（福井市立郷土歴史博物館学芸員）のご尽力を賜つた。

それにしても、かつて追放刑に処された町人身分の者が、四民平等の世になつたからといって、

数年前までは雲上人であった旧藩主と親しく交流できるであろうか。慶永と関戸の間を取り持つ人間の存在無しには叶わない状況といえる。仲介者としては、山本正伯をはじめとして、岡倉や柳本の名も浮上するだろう。

あるいは士族授産を構想していた慶永が、右掲の人びとを介して、関戸が温めていた不動産投資と都市整備を連携させた事業計画に力を貸す決断を下した、とも推測できる。華士族の家禄・賞典禄の廃止も取り沙汰されていた明治九年五月、本多敬義が神戸の関戸邸隣接地に移住したのは、士族授産に関連しての動きであろうか。『兵庫縣人物列傳 第一編』（興信社出版部 一九一〇年）によると、敬義は神戸元町通で質屋を開業している。娘・衣きぬ（幾奴）の婿養子に迎えられた小柳津精二おやいづせいじ（旧岡崎藩士）は、神戸市会議員、商業会議所議員等を歴任し、神戸の名士のひとりに数えられた。

右掲の人びと以外にも、松平文庫「士族」に履歴がある「瓜生三寅ミトラ」が明治五年から同七年まで初代神戸税関長を務め、柳本も明治十年から同十七年まで兵庫県御用掛、同県少書記官、同県大書記官を歴任している。いずれも関戸とは何らかの接触を持ったはずである。

このように、関戸をはじめとして越前福井出身者が開港地神戸で織りなした交流は、まことに興味が尽きぬ歴史模様と言わねばならない。

むすび

松平文庫の福井藩人事関係資料とその管理を担われる方々のお陰で、神戸近代史においてこれまで放置されてきた関戸由義の事績を検証することが叶った。越前福井藩は幕末維新期に数多あまたの人材を各界に輩出したが、そのなかに関戸のような異色の人物もいた事実をあきらかにしたこと、多少なりとも「恩返し」ができたのではなからうか。

人物史や地方史・郷土史という「小文字の歴史」に刻まれた有名無名の人びとの営みの真意は、

一国全体、さらには世界規模での政治史・経済史・文化史、すなわち「大文字の歴史」と照合すること鮮明となろう。同時に、「大文字の歴史」として語られてきた史実は、「小文字の歴史」を読み解くことによって、その秘めたる実相を顕現するはずである。

『福井藩士履歴』として刊行が進む松平文庫の福井藩人事関係資料とそれに関連したレファレンスのさらなる充実が、今後の歴史研究を新たな地平へと導く頼もしい原動力になることを願ってやまない。

註

(1)但し、『官員録 官版 明治3年』（国立国会図書館デジタルコレクション）を見ると、「源 由義 関戸」は三十七丁「民部省通商司権大佑」項に記載されている。同官員録巻末には手書きで「改正年月日 明治三年六月七日から七月十日の間 佐久間調」とある。明治三年七月十日、太政官宣達によって、従来事実上の合併状態（「民部大蔵省」とも呼称）にあった民部・大蔵両省は分離され、通商司は大蔵省管轄になっている。

(2)岡倉については長野栄俊（二〇一三年）「岡倉天心の父親について」『生誕150年・没後100年記念 岡倉天心展』福井県立美術館 二一七〜二一八頁「(二) 福井藩探索方として」参照。また、ヴァン・リードについては渡辺礼三（一九八六年）『ハワイの日本人・日系人の歴史 上巻』ハワイ報知社 一五一〜一六五頁「ヴァンリード略伝」参照。

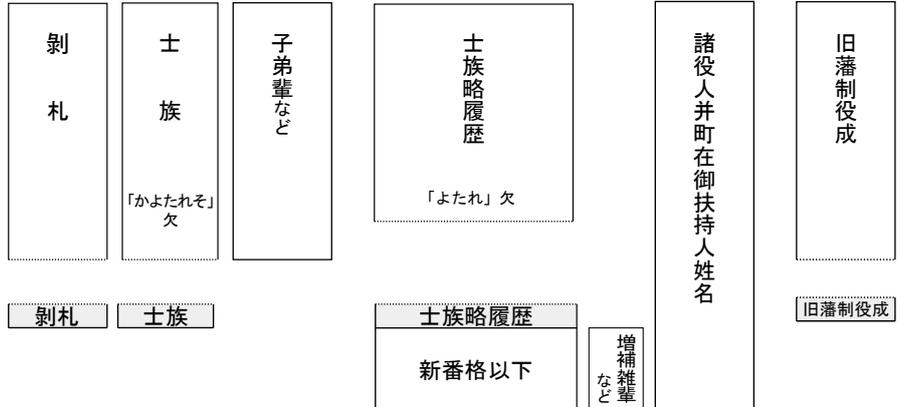
参考資料

各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数

(嘉永5年)	
家格	人数
本多家	1
高知席	16
高家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士(役番外)	106
大番など	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組(足軽)	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

- ・荒子・中間等の小者973名を除く。
- ・舟澤茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」『福井県地域史研究』創刊号 1970年による。



* 嘉永5年の表にある与力39名は、慶応2年10月22日までに全員が士分として召し出されたため、「剥札」「士族」「士族略履歴」に記載されている。

* なお、嘉永5年の表に載っていないが、元武生家来(府中本多家家臣。ただし物頭以上)の29名も明治2年11月25日の改革で士分とされたため「剥札」「士族」に記載されている。

「新番格以下」及び「新番格以下増補雑輩」「雑輩之類剥札」に掲載されている家数・人数

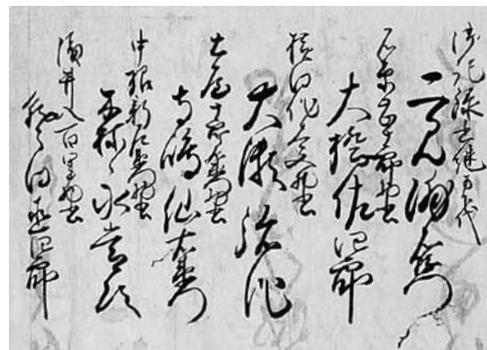
	新番格以下		増補雑輩 人数	剥札 人数
	家数	人数		
イ	27	115	30	1
ハ	30	117	12	
ニ	6	31	4	
ホ	7	36	2	
ト	12	56	2	
チ	1	1	2	
リ	1	1		
ヲ	35	135	10	
ワ	13	66	3	
カ	19	80	13	1
ヨ	28	104	12	
タ	41	173	13	2
ツ	10	41	7	
ネ	1	3		
ナ	17	78	5	1
ム	9	43	3	
ウ	8	42	8	
ノ	17	67		
ク	10	40		1
ヤ	25	98		2
マ	25	103	14	
ケ			1	
フ	16	64	10	1
コ	11	43	4	2
エ	8	27		
テ	2	8		
ア	16	69	7	
サ	25	109	9	1
キ	8	36	2	
ミ	8	43		1
シ	16	75	6	2
ヒ	6	22	4	
モ	7	28	2	
セ	2	7		
ス	4	17	2	1
合計	470	1977	187	16

- ・点線は原本の区切り。
- ・家数・人数のイ～ヨは確定値。タ以下及び新番格以下増補雑輩・雑輩之類剥札は筆耕原稿などによる概数。
- ・新番格以下増補雑輩・雑輩之類剥札は家として管理されていないので人数のみ。

「書役」について

「新番格以下」1～7、および「雑輩之類剥札」の巻末にはそれぞれ以下の「書役」が記載されている。「新番格以下増補雑輩」には記されていない。

「書役」について詳しくは吉田健「幕末維新期の福井藩人事関係資料(松平文庫)について」『福井藩士履歴 1 あ～え』解説を参照。



書役名	「新番格以下」にみえる記事
御記録書継方下代 二見浦右衛門	(弘化四年九月) 同月十八日御目付御記録書継方下代被仰付候
石原甚十郎物書 大橋佐四郎	—
横田作太夫物書 大瀬弥作	(元治元) 同年六月廿四日昨秋詰中御目付御記録書継被仰付、格別出精相働候二付小寄合格ニ被成下、金五百疋被下置候
土屋十郎右衛門物書 寺嶋仙右衛門	天保六未年御目付大関新五左衛門組江被召抱 同十四卯年物書役被仰付
中根新左衛門物書 森永常次	御目付物書 森永儀兵衛(真柄)と同一人物か?
浅井八百里物書 鷺田直四郎	弘化四未年物書役被仰付 弘化四未年十月十九日江戸詰之処御呼返し、浅井八百里物書役被仰付